

たったひとり

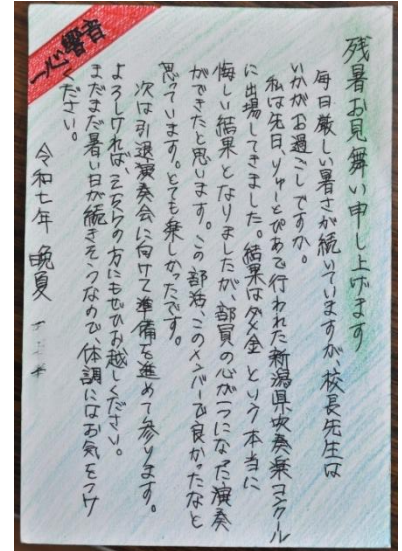
校 長 武井 正明

先日吹奏楽部の部長さんから、残暑見舞いをいただいた。

「一心響音」と左肩に、涼しげな緑をバックに、丁寧で美しい文字で綴られた、嬉しい一枚である。文中の「ダメ金」に悔しさが滲む。私はこの言葉が嫌いだが、これほど無念さを表した言葉もない。大人への階段、ほろ苦い青春の1ページだ。

と同時に「部員の心が一つになった」「このメンバーで良かった」「とても楽しかった」という言葉から、彼女が一生懸命に部をひとつにまとめようとひたむきに努力を重ねてきた時間と成就感とが伝わる。若いて羨ましいなあ…。

私が畏敬する、かつての上司に「皆が全員気持ちよくやっとうまくいっている組織など、この世にひとつもない。そういう組織とは、必ず誰かが見えないところで必死に頑張っているものだ。あなた方はそこを決して見逃してはならない」と指導されたことがある。



そう、校長と部長。立場は違えど私にはわかる。その組織にひとつしかない「長」という立場が、どれほど苦しいか、ということ。

風通しの良い組織では、様々な角度から意見が飛び交うものだ。それは素晴らしいことだ。本音や主張が許されない組織の空気は、どんどん澱んで沈黙していく。しかし、多くの意見や要望をダイレクトに受け止めてくると、それが総て叶えられるわけではないから、聞く立場として、無力さに悩むことも度々ある。

組織の長としての、最重要任務とは「決める」ことにあると思う。

「決断」には必ず「反対勢力」が伴う。だから、皆にいい顔など出来ない。時には誤解も生じる。しかし、信じて決めた道をブレず、逆風にも笑顔で先頭をゆくのが真のリーダーだと、私は思う。

リーダーは孤独なのです。様々な声に傾聴し、思案し、最後は自分で決断せねばならない。そして、責任を取らねばならない。だから、校長室があるのです。

あなたは、多くの仲間から部長に推され、まもなくその任をやり終えます。

吉中での経験は、きっとあなたの人生の、大きな財産となることでしょう。

「終而亦始（終わってまた始まる）」…引退演奏会は、一つの区切りであると同時に、新たな人生のステージの始まりです。

21日は、吉中楽団の集大成を、たっぷり堪能させていただきます。